

音楽科における学習困難点

佐 伯 正 一

まえがき

この困難点の内容は、新学習指導要領に基いた事項から、生徒が約6,70%以上困難を感じると思われるものを選んで考察した。

困難点の選び方も、今日の移行期における現段階としてであるから、将来はこれと異った内容のものが加わるだろうし、またこの内容の中には困難として含まれないことも起り得ると考えられる。

それは、前身学校の内容、程度や、本校における教育的環境および指導などの充実によって変わってくるからである。次にこの度の学習指導要領の改正に伴い、創作は昭和35年度の中1・中2に行い、中3・高校については、その段階に至っていないので省略した。また器楽についても、中1にはじめてハーモニカ使用を行った程度で発表の段階に至っていないのが現状である。

中 学 校 の 部

歌 唱

区 分	困 難 点 の 内 容	考 察
中 1		
(1)ウ	1. 曲の気持にふさわしい表現	1. 曲の気持が、調、拍子、速さ、強弱および詞の内容と関係あることに対して関心が薄い。今までの教育が正しい歌唱表現を生徒にしいた傾向があったので、自然に無関心になっていたのであろう。長調と短調、拍子の種類、速さのちがいなどいろいろの表現や鑑賞をさせて、その曲に最もふさわしい表現を納得させ、その上で歌唱させる努力が不足している。
(1)エ	2. 楽曲がもつリズム、旋律、速さなどの特色を生かした表現	2. 生徒は旋律をはあくすることは比較的容易であるが、リズムと速さを正しく表現することは困難である。ピアノなど指導楽器からはなれて、歌った場合、リズムがだれ、速度が乱れ勝ちになる。これは、楽曲のもつリズムや速度にのった歌い方とそうでないものとを比較理解させる努力の不足による。
(2)ア	3. 無理がなくむらのない発声	3. 変声期における一部の男子の不自然な発声に影響されて、全体の発声に乱れが生ずる。これは自身の発声状態を知ることや、変声についての知識の不足、さらに自然、不自然な発声に対する判別力の不足によるのであろう。
(2)イ	4. 母音および子音の明確な発音	4. イ. 母音の中でイ、エの発音が固くて、不自然である。イは固くうちにこもる。エはイに近い固い発音になり勝ちである。これは口形の理解の不足もさることながら、聴覚的な判断が不徹底ではないか。 ロ. 子音の中でハ行のHが不明瞭である。これは口で発音させるのではなく、のどで行われる子音であるので明瞭さを欠き易い。特に歌唱ではHよりもその母音の方が耳に残るので会話の発音とちがってHの強調が大切でなければならない。 ハ. 鼻濁音ができない。この地方ではこれを発音しないのが最大の原因であろう。鼻濁音と濁音の区別を耳から矯正すべきであろう。
(2)オア	5. 長調、短調のそれぞれの主要三和音の響き	5. T.S.Dの和音感の判別は容易ではない。これは、過去の最も効果のある時期における経験が浅いということに大きな原因がある。しかし、生徒が心を集中してきき、反復継続的に行うことによって判断ができるようになる。この点の不十分さを感じる。

音楽科における学習困難点

(3)イ	6. 平易な音程やリズムをもつ旋律を視唱	6. 音程については、上行の順次進行に比べて下行順次進行の音程がとり難い。また、飛躍音程ではレ、ファ、ラの音が不安定である。階名暗唱や、反射的階名唱、分散和音唱などの反復練習の不足を感じる。 次に音程よりも困難なリズムがある。四分音符以外はほとんど正確にとれない。これは拍子をとって歌唱する習慣に欠けていることが根本原因である。
(3)エ	7. 記憶している旋律を記譜する	7. 生徒は旋律を記憶していても、それを記譜することが非常にむづかしい。中でもリズムの記譜のまちがいが多い。これは拍子をとらないことと、拍子の中のリズムの判断が不十分であること、リズムと音符が結びついていないことなどの原因による。これには写譜や聴音、視唱力をのばすことが必要である。
中 2		
(1)エ	1. 旋律にふさわしい表現をする	1. 旋律線の山型、谷型、波型の感覚的な特徴を理解すること、リズムの反復、対照、変化などについての理解を欠くために、それにふさわしい表現がむづかしくなっている。
(1)カ	2. 変声に伴う歌唱困難。	2. 変声期の自覚症状として、音域が狭くなる、音程の不安定、かすれ声、息が続かない、精神的な不安、疲労し易い、などがあげられる。この歌唱困難から精神的な不安になり、ひいては音楽に対する嫌悪感を起し易い。
(2)カ	3. スタカート	3. スタカートは音符の半分を休符にして歌うことを原則とする。しかし曲の表現のちがいによって必ずしも一定ではないので、生徒はこれを正しく理解し難いようである。 また呼吸法のまちがいの多いのは、一音一音息つきを行うことである。
(2)カ	4. マルカート唱法	4. 生徒はスタカートで歌うか、あるいはアクセントの弱い歌唱になって正しい表現が困難なようである。これはのぼされた弱声の中で、所々にアクセントを入れる呼吸の練習によって習得するような訓練の不足によるものではないか。
(2)カ	5. レガート唱法	5. 一音一音にアクセントを入れたり、音のつながりが不十分になったりする。またこのことができるようになったとしても、さらにテンポがおくれ勝ちになったり、リズムがだれたり、また発音が不明瞭になり勝ちで、正しいレガート唱法の習得は困難である。
(2)ク(ウ)	6. 中、低声部の理解	6. 主旋律を好んでも、中、低声部の旋律の歌唱を好まない傾向がある。これはハーモニー感の美しさを味わせる作業の不足と、完成された合唱音楽の美しさを味わうことの不足からであろう。
(3)イ	7. 短い旋律を聴音記譜する	7. 聴音記譜する作業は生徒の不得意の一つである。音高と階名、リズムと音符の関係が、十分理解されていないことに原因があると思われる。前学年の旋律視唱、旋律記譜の不徹底による。
中 3		
(1)オ	1. 心のこもった表現をする 2. フレーズ 大小フレーズの表現上の理解	1. 変声期終了後で声にも特色が出て、個性的な表現ができる時期であるが、旋律の高まりや、静まりを心に照応した表現、音楽的ふんい気を感じに照応した表現については困難である。 2. 2, 4, 8小節のフレーズや、終りの部分などの表現上の、反復、対照、変化に対するまとまりに無関心である。2つの動機を感情のつながりを感じさせない表現になり易い。小楽節としてまとまった1つの感情の流れの中に2つの動機の対照を理解することが必要である。これは創作における曲の分析や、動機に対する第2動機の創作作業と相まって理解されるものである。次に前楽節と後楽節の類型であるが、前楽節の呼びかけの音楽的言葉に対する後楽節の答(解決)に相

(2)ウ	3. 八分の六拍子のリズム感	<p>当する表現のちがいを理解しなければならない。また曲の中の変化ある旋律に対する全体との調和を意識することに欠けている。これは曲の分析や創作に大きな関係があるので、この作業の不十分が理解を困難にしている原因であろう。</p> <p>3. この拍子は、三拍子の二拍子であるが、部分的な三拍子感が、その上に大きく二拍子を形成しているので、この複合された拍子感到に混乱する。</p> <p>部分的な三拍子感の不徹底が根本的原因である。さらに三拍の二つのグループを二拍にとる二拍子感が形成されてはじめて八分の六拍子感ができるのである。</p> <p>つまり大きな一拍の中に細かい三拍がきざまれていなければ、この拍子の理解にはならない。譜面上における四分の三拍子との判別も上記の理解によって解決できる。</p>
(2)キ	4. 指揮者の指示に対する順応性	<p>4. 指揮に対する順応性が鈍い。強弱に対する指示にのらないで、その表現の変化に乏しい。またテンポが次第に早くなって指揮におくれて気分がだれる。レガート、マルカートの表現に対して指揮による順応度が低い。指揮による訓練の未習熟と、表現技術の未熟に起因している。</p>

鑑 賞

区 分	困 難 点 の 内 容	考 察
中	1	
(1)ア	1. 心を集中して聞く態度	<p>1. 鑑賞の根本である心を集中して聞く態度が長く続かない。生徒に親しみ易い曲であっても新しい曲や、知り過ぎている曲の場合は長続きしない。聞く態度に対する心構えを知的に話してやることは、勿論大切であるが、音楽鑑賞の基礎的能力の不足が最も大きい原因であるようだ。</p> <p>よりよい鑑賞とよりよい態度を作るためには、音楽の多面的な聞き方と同時に反復して回数多く聞くことであろう。例えば、どんな感じの曲であるか、演奏形態は何であるか、楽器は何で演奏されているか、いくつの部分に分れている曲か、何拍子の曲か、長調か短調かなど聞く度にその観点をかえていく。このような点についての教師の工夫の不足にも原因があるのではないか。</p>
(1)ウ	2. リズムと拍子	<p>2. 三拍子は比較的容易であるが、しかしテンポが早い場合にはまちがいが多いようである。これはリズムと拍子、テンポ、アクセントなどが関連し合っているので決定的な判断の下し得ない場合もあり得る。</p> <p>次に二拍子と四拍子の区別および六拍子と三拍子の区別は大変むづかしい。その拍子のもつ表情とリズムの最も分り易いものに限って指導し、その徹底の上に立たなければ、徒に混乱を起し易い。何れにしても、強弱のアクセントについて、常に正しい拍子をとる鑑賞態度を必要とする。</p>
(1)ウ	3. 和声	<p>3. 生徒は音楽の旋律に比べて和声の美しさに対する関心に欠けている。歌唱の場合と同じ結果であって、和音感に対する基礎能力の不足と表現と鑑賞の両面から次第に培われていかなければならない。</p> <p>実際に演奏をきいて各声部の分析と総合の感覚的な比較ができれば最もよいと思われる。</p>
(1)イ	4. 愛好する鑑賞曲の数	<p>4. 生徒の多くは音楽授業以外に鑑賞する機会が至って少い。また授業中における鑑賞曲の数は限られてくる。1,2度聞かせる程度では真に愛好する曲となり得ないので、数を余り多く望むことができない。生徒自身が鑑賞曲に対する消化力が進んでくればある程度可能になるだろう。</p>

音楽科における学習困難点

中 2		
(1)ウ	1. 演奏形態「重奏」についての理解	1. 管弦楽に比べて重奏に対する理解，興味が低いようである。弦楽四重奏では，第1バイオリンと第2バイオリン，第2バイオリンとビオラ，ビオラとチェロはそれぞれ音色が非常によく似ている部分があるので，比較的区別し難い点や，旋律の交錯する複雑さが理解されないようである。殊に重奏のもつ渋さは，管弦楽のもつ色彩的な華やかさに比べて生徒の理解と興味をひかないようである。
(2)イ(ア)	2. 主旋律と伴奏	2. 生徒は主旋律だけに耳を傾けるが，それに対する伴奏の変化を聞こうとしない。伴奏の変化は主旋律の表情を変えるおもしろさがあるのであるが，単純な主旋律だけの鑑賞になる傾向がある。常に伴奏の動きに注意を与え，音楽の縦の美しさ，おもしろさを合わせて鑑賞する態度に欠けている。
(2)イ(ウ)	3. リズム，旋律，和声など要素の分担	3. 音楽を漠然と聞いて，音楽のもつリズム，旋律，和声の美しさ，おもしろさを部分的に味い，さらにそれらのもつ分担とその総合的な聞き方に対する態度に欠けている。またリズムと旋律，旋律と和声，和声とリズムの組合せによる関係の理解に欠けるために音楽の総合的な，そして音楽のもつ深さを理解するに至らない。
(2)ア	4. 楽器の種類や，個々の音色の聴き取り	4. 楽器群の聞き取りが，比較的容易であるが，個々の楽器を知ることには，単なる記憶による場合は理解しにくい。視覚的，聴覚的な機会の反復によらなければ身につかない。つまり楽器の名前，形，演奏法，音色が総合されて理解されなければ，本当の理解にはならない。名前と形が一致しなかったり，また音色をまったく理解していなかったり，ちぐはぐになっている場合が多い。 楽器の音色で最も区別しにくいものには，木管楽器のフルート，オーボエ，クラリネットであろう。これらは音の高さが非常に似ていること。金管や弦に比べてよく似ている点で混乱するのであろう。フルートのひきしまった明るい音，オーボエの鼻のつまった，暗いさみしい音，クラリネットの開いた朗々とした音などの特徴の区別が困難である。
(2)ウ	5. 変奏と形式の発展に対する理解	5. 二部，三部形式や，複合三部形式などは割合に理解し易いが，変奏曲形式の変奏が理解されにくい。これは主題理解の不徹底もあるが，変奏の変化の仕方がどうなっているかという，変化の内容がつかめない点が多い。 次にソナタ形式におけるように，主題の反復，対照や変化は比較的容易に理解し易いが，発展部のようなものは理解しにくい。これは前者のように旋律の形がはっきりまとまったものではなく，部分的にもつかみどころがないので理解しにくいのは当然であろう。しかし，主題提示部と主題反復部には含まれた変化発展の部とし，対照的に大きな部分として次第に理解を深めることが大切であろう。
中 3		
(1)	1. 好ましい音楽と好ましくない音楽とを判別する力	1. 好ましい音楽と好ましくない音楽とはどんな音楽であるかという定義は下し難いが，一般的に歴史的に価値の高い音楽とその上に作られた今日の音楽，つまり，われわれの精神的教養の糧となるような音楽と解釈してみた。 社会に流れている音楽の中で，つまらない音楽をくだらないと判断し，授業中に与えられるような音楽を積極的に求めようとする鑑賞態度に欠けている。 これは，日本の生活環境の不十分と日本音楽の伝統性の弱さに起因していることはいうまでもない。これを教育に求めなければならない

一 般 研 究

(2)イ	2. 音楽の時代的特徴を感じ取る	現状を前提としたい。鑑賞曲を反復して聞く機会の少いことや、多面的な鑑賞能力の不足から、真に理解と興味が徹底しない。このことがよい音楽に対する鑑賞態度を弱め、判別力を失い、やがて好ましくない音楽に流される恐れを生ずる。
(2)ウ	3. 音楽の民族的特徴を感じ取る	2. 音楽の古典、ロマン、近代、現代の時代的特徴を感じ取るまでに至らない。これは各時代の歴史的背景とか、時代的特徴は知的に知り得ても、それを音楽の上に結び付けて鑑賞することが困難である。 常に問題になる音楽に対する感知力の不足である。それに同じ時代のいくつかの曲の共通スタイルと他の時代の音楽スタイルの相異点を知ることであるが、少い時間に徹底させられない問題も大きい。 3. 主として19世紀後半の国民楽派の民謡や民舞音楽を指して考えたい。生徒は民族的音楽を区別して聞くことができない。これは音楽の時代的特徴の困難と同じ理由によるが、その土地の素朴で土臭い、そして人間的な温みを感じさせる民族的な特徴は、19世紀のロマン音楽の中に含まれているので一層むずかしさを感じさせている。

創 作

区 分	困 難 点 の 内 容	考 察
中	1	
(1)ア	1. 歌ったり奏したりして、自由に旋律をうたい出す	1. 旋律を自由にうたうことは、望ましいことであるが、生徒が過去の経験が浅いためと、羞恥感から表現を好まない。羞恥感には自己の歌唱能力に自信のないことも含んでいる。歌唱能力の中には、音程やリズムがあいまいで、教師さえ記譜することのできないものが多い。しかし楽器で奏する場合は少くとも音程が正確であるために、生徒はこれを好み、またこれからはじめることが望ましいようである。何れにしても、歌唱の階名暗唱、歌曲の暗唱および、視唱、聴音などと有機的な結びつきが大切である。
(2)	2. 自分の作った旋律を楽譜として書き表わす力	2. 旋律の記憶力が最も欠けている。根本的には旋律を階名として表わす能力に欠けることが原因である。またリズムの音符で表わす力も足りない。このために音と無関係な記譜のあることは恐しいことである。これは、写譜や聴音の学習不十分を補う努力を忘れてはならない。
中	2	
(1)	1. 詞につける旋律	1. 詞に旋律をつける場合、動機を作ることや全体をまとめる力がない。調や拍子を選択することが、できないので動機そのものを作ることや、詞の感じと旋律の感じが合わない場合が多い。この段階では、小節の部分創作から徐々に拡げることが、自然であり、また生徒がこれを好むようである。
(1)エ	2. 与えられた和音をもとにしてまとめた旋律を作る	2. 和音の分散旋律はできても、和音間の旋律に対してのまとめに困難がある。また非和声音の使い方が思うようにいかない。和音間の旋律については、分散旋律の音感がないために、つながりの不自然さに気付かない。 また非和声音についての理解の不十分なために、和声音と非和声音の区別すらあいまいになり、和声に合わない旋律を作る結果になるようである。

高等学校の部

歌 唱

区 分	困難点の内容	考 察
(1)エ	1. 楽曲にふさわしい表現をする	1. ただ単に旋律の動きを歌うだけで、それにふさわしい表現にいたらない。 教師の表現によって曲想をつかむことや、歌詞の意味を理解して表現と結びつけて考えない。いろいろの記号や標語も、その曲のふさわしい表現に絶対必要であるが、このことに対する関連性と総合的表現に欠ける。
(2)オ	2. 曲の感じやクライマックスのとらえ方	2. 曲の感じのとらえ方が悪い。表現技術の未熟に問題はあるが、さらに感情の照応性に欠けている。またクライマックスは、音の山に求めるだけでなく、感情の伴った山としてとらえ、表現すること。
(2)ア	3. 発声 イ. 共鳴 ロ. ソプラノやテノールの高声 ハ. 飛躍的音程の発声 ニ. p, f の発声	3. 変声後であるから大人としての正規の発声段階に入る時期である。 イ. のどからの発声傾向が強く、口から上の共鳴の習得が困難である。 鼻腔に共鳴するハミングの発声段階を経て、母音の段階において共鳴が続かない。さらに上下のチェンジが円滑にいかない。これは発声音に対する耳の訓練が不十分であると同時に、自身の発声状態をつかむみ、工夫する努力を重ねることである。 ロ. 一般に二点g音が歌曲として楽に歌える発声が望ましい。しかし実際は生徒にはこの発声は困難である。それは、正しい姿勢、呼吸法の上に継続的な、しかも適当な方法による訓練を必要とする。 ハ. (イ) 上行…低音発声と高音発声の響きや声質が異なるために、不自然な発声になる。これは教師の範唱によらなければならないが、低音発声中、高音の音高を予想し、しかも低音の響きをうしろから頭部へもっていくように高音発声する技術の習得がむづかしいようである。 (ロ) 下行…高音から低音への発声は、上行よりは多少やさしい。これは、高音の正しい発声の基本で、高音発声中、低音の音高を予想し、力を抜きながら低音へ移る発声方法の会得がむづかしいようである。 ニ. この発声は、呼気的大小による点の理解はできているが、その他に響きの拡がりによる関係が、大変むづかしいようである。またpにおける発音は、単に呼気を小さくするだけに止め、鼻腔の奥付近ののびのある響を忘れ勝ちである。
(2)ア	4. 発音	4. 発音では、中学校における明るい明確さに加えて、多少暗さをおびた、丸味ある発音が、教材の心理的表現からみて必要である。この感覚の微妙さが生徒聴覚的判断のむづかしい点であろう。口腔の後方に響きをもってくることに加えてiはeに、eはaに、aはoに、oはuに近い発音の会得に表現上の困難をもっている。

鑑 賞

区 分	困難点の内容	考 察
(1)イ	1. 音楽の芸術的価値を感得する力	1. 音楽の芸術的価値に対する感得力に欠けている。しかしこれを求める積極性に欠けているわけではない。これは中学校における音楽の要素的な理解力の不足によるものが根本的な原因であろう。また文化的背景における音楽として、作曲者の意図における音楽として、関連的に思考を加える態度に欠けていることなどがその原因として考えられる。

(2)エ	2. 音楽の流れの中における多様性と統一性の聴取力	2. 音楽の反復，対照，変化の部分的な聴取力はよくできるが，部分と部分の対照的な美しさや，その統一的な鑑賞に欠けている。 変化の中の統一，統一の中の変化として，一つのまとまった芸術作品を鑑賞する統一性に欠けることである。これは音楽が瞬間的に流れていくので，全体を統一することは比較的困難であるが，音楽の流れの変化をよく知るために，何回も聴かなければならない。そしてその曲のすべてを知ってから思考的に統一をはかる努力に欠けるためではないか。
(3)カ	3. 各地域，民族の音楽の特徴についての理解	3. 民族音楽の特徴を聴取する力もむつかしいが，地域的に民族の音楽を知ることにはもっとむつかしい。これはその地域の気候，風俗，習慣，思想などの知的理解と関連してその音楽の特異性を判断するのであるが，民族音楽の類似，または相異なる多くの音楽に接する機会が少いことも原因となるだろう。